



Title	【定年退職教授の履歴および主要業績】 釘原直樹教授
Author(s)	
Citation	大阪大学大学院人間科学研究科紀要. 2018, 44, p. 345-349
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/68307">https://hdl.handle.net/11094/68307</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 【定年退職教授の履歴および主要業績】

釘 原 直 樹 教授



くぎ はら なお き  
釘 原 直 樹 教授

1982 年 3 月 九州大学大学院教育学研究科教育心理学専攻博士課程単位取得退学  
 1982 年 4 月 大阪大学人間科学部教務職員  
 1985 年 3 月 大阪大学人間科学部助手  
 1985 年 4 月 九州工業大学工学部講師  
 1988 年 8 月 九州工業大学工学部助教授  
 1993 年 12 月 博士（教育心理学）（九州大学）  
 1998 年 4 月 九州工業大学工学部教授  
 2003 年 4 月 大阪大学大学院人間科学研究科教授  
 2018 年 4 月 大阪大学名誉教授

釘原直樹教授は、1975 年 3 月熊本大学教育学部心理学専修を卒業し、1982 年 3 月九州大学大学院教育学研究科教育心理学専攻博士課程を単位取得退学、同年 4 月大阪大学人間科学部行動学講座教務職員に採用された。1985 年 3 月大阪大学人間科学部助手、同年 4 月九州工業大学工学部講師に就任、1988 年 8 月同助教授、1998 年 4 月同教授を経て 2003 年 4 月大阪大学大学院人間科学研究科人間行動学講座教授に着任した。大阪大学、人間科学研究科、人間科学部の発展に尽力し、2018 年 3 月 31 日限り定年退職するものである。

同教授の主な研究領域は社会心理学の中でも特に集団を対象としたグループ・ダイナミックスの分野である。具体的な研究テーマは緊急・異常事態の集団行動と社会的手抜きを中心とする集団パフォーマンス、それから集団の同調・斉一化現象である。

緊急事態の集団行動に関する研究としては、第 1 に 50 名の集団が正面から、あるいは側面から早い速度で互いに衝突する場면을構成して、成員の混乱や挙動を上空から観察する野外実験を行なった。第 2 に緊急事態から集団が脱出する際の混乱や相互攻撃、譲歩、追従行動を分析するための実験室実験を行なった。出口が少数であるにもかかわらず危機を回避するために多数の実験参加者が同時脱出を試みる状況や、迷路での遭遇や衝突行動を作り出す実験装置を開発した。第 3 に旅客機の離陸失敗事故に巻き込まれた 100 名近くの乗客に対して、事故直後にインタビュー調査を行い、実験室実験の結果と比較した。第 4 に事件や事故が発生した際のマスメディアの集中豪雨的報道について分析した。新聞や週刊誌の記事分析を通して、記事量の時間的推移、攻撃対象の変遷、読者のバイアスについて検証した。それを通してスケープゴート現象の存在を明らかにした。

集団パフォーマンスに関する研究としては、第 1 に実験室内で男女 9 名の実験参加者に綱引きをさせ、個人の力と比較することにより、社会的手抜きの男女差を検証した。第 2 にスポーツの八百長やホームアドバンテージを明らかにするために、過去 50 年以上にわたる相撲と野球

(日米) のデータを分析した。相撲に関しては技量審査場所実施以前から勝敗の分布が変化し始めていることが伺えた。また野球のホームアドバンテージについてはシリーズのような重要な試合には日米ともに特徴的なパターンがあることが明らかになった。

集団の同調・斉一化に関する研究としては第 1 に、Asch(1956) が行なった実験と同様の状況を設定し、それまでは研究されていなかった反応潜時を測定する実験を行なった。この実験では集団サイズの効果も明らかにするために実験参加者が次々にサクラになるような新しい手続きを導入した。第 2 に集団の斉一化プロセスを明らかにする実験を行なった。体育館に実験参加者 24 名が円状になり、実験者の掛け声とともに実験参加者は一斉に白か緑のカードを出し、集団全体が同一の色になる(斉一化する)まで試行を繰り返した。白と緑の割合の初期状態が収束プロセスや速度に影響することがわかった。

これらの研究成果は多数の著書や内外の学術論文の中に掲載されている。そして 1986 年には日本心理学会研究奨励賞を受賞している。

学会活動に関しては日本社会心理学会の理事を長きにわたり務め、2009 年から編集委員長として学会誌の編集作業を行なった。また日本心理学会の理事や代議委員や編集委員、それから日本グループ・ダイナミックス学会の理事や監査も務めた。さらに日本心理学会の優秀論文選考委員、日本学術振興会科学研究費委員会専門委員なども歴任した。2009 年に大阪大学で開催された日本社会心理学会と日本グループ・ダイナミックス学会の合同大会の事務局長も務めた。

社会活動としては日本心理学会の高校生のための心理学講座や受験生向けの国公立大合同ガイダンス、岡山大学や群馬大学での講義なども担当した。またテレビやラジオにも出演し、社会心理学研究の成果を一般に紹介することに務めた。著作の中の文章の一部は複数の大学の入試問題として引用されている。

以上、同教授は教育と研究を通じて大阪大学人間科学部及び大学院人間科学研究科の充実に寄与するとともに、社会心理学とグループ・ダイナミックス研究分野の学術振興に貢献している。

## 主 要 業 績

## 著書

1. パニック実験 ナカニシヤ出版 1995 年 12 月 (単著)
2. グループ・ダイナミックス 有斐閣 2011 年 3 月 (単著)
3. 人はなぜ集団になると怠けるのか 中公新書 2013 年 10 月 (単著)
4. スケープゴーティング 有斐閣 2014 年 12 月 (編著)
5. 腐ったリンゴをどうするか 三五館 2015 年 7 月 (単著)
6. あなたの部下はなぜやる気のあるふりをするのか ポプラ社 2017 年 5 月 (単著)

他 25 冊

## 学術論文

1. Kugihara, N.(1985). Effect of anticipated test score distribution upon learning motivation: From the view point of distributive justice. *Japanese Psychological Research*, 27, 72-78.
2. Kugihara, N.(1998). The process of achieving group uniformity. *Psychological Reports*, 83, 755-766.
3. Kugihara, N.(1999). Gender and social loafing in Japan. *Journal of Social Psychology*, 139, 516-526.
4. Kugihara, N.(2001). Effects of aggressive behavior and group size on collective escape in an emergency: A test between a social identity model and deindividuation theory. *British Journal of Social Psychology*, 40, 575-598.
5. Teraguchi, T., & Kugihara, N.(2015). Effects of labeling and group category of evaluators on evaluations of aggression. *PLoS ONE*, 10(12), e0144384. doi:10.1371

他 49 報